

MARUMO LIGHTING NEWS

■ 1977-4-VOL-26

エルビスが死んだ。今ごろ何をなどと言わないでほしい。永遠のエルビスだから。いつまでも心に追悼文を掲げるのだ。ステージの彼は、いつも内側から輝いていた。自ら燃焼して周囲を輝らす太陽のような光が。

シラケの時間が過ぎて、優しさ、メルヘンそしてロ

マンを人々は求める。ロックの再来もひとつの現われだ。でも、それらは遠いところにあるのではない。エルビスのように、何事かにホットに生きる人に、やさしさもロマンも宿るのだ。あなたにだって。一生懸命、頑張っているのだから。

磨かれてあなたも、いつの日か綺羅星のように輝く。



「しんしゃく源氏物語」—ヨネ企画

榊原正常作

「しんしゃく源氏物語」と私

— 公演に至るまでの喧騒と楽しみ —

米本 一夫
ヨネ企画演出家

この戯曲の興味の焦点は、「しんしゃく源氏物語」の題目のように源氏54帖のうち、特に派手な個所でもない一俯瞰するとむしろ裏側に位置される「末摘花」「蓬生」の巻に素材をとった点です。稀代の醜女の主人公の姫、周到的配慮で位置されている副次的な女性達、これらの人々を通して、作者は深い愛情を惜しみなく姫にそそぎます。容貌とは全く極をなす姫の心根は、純真で清らかでこの劇を観る人達に感動を与える筈です。

また作者は、むやみにそのやさしさだけに惑溺してはいません。冷徹な目で確実に事のなりゆきを見とっています。そしてこの作品を知性的なものとして。天性の洒落っ気は逞ましいエネルギーで？噴射され“ユーモア”をかもしだします。

またこの劇は言葉が面白いのです。

源氏物語の登場人物が、特に宮家のお姫さまが、現代の観光京都の祇園の舞妓さんと同じ言葉を喋るのが妙です。この可笑しさは、その言葉を使う姫の肉体から、当然生物的臭味を消削します。同時に姫の古風な愛情は純粹な姿で露呈してきます。伝法肌な大阪弁—これは変なことですがそうみえるのです—の叔母さん。東京の下町弁に近い言葉で喋る少将さん。多彩な姫のとりまき達。それぞれが自己の“愛”と“物欲”の方向に真直ぐ顔を向け生き、そして喋っている様子は奇妙な現代性をすら感じさせるのです。

*

この様な人達を平安朝そのままの自然風俗中に生活させたい。それが演出としての希望でした。ですから出来るだけ平安朝貴族生活の復元に意を用いました。一でもこれは、考証的にも、経済的にも無理なことでした。一なぜなら、この時代は自然と人間が共存した、人物が生活の借景に自然を利用していた、というよりもむしろ自然の一部として人間が存在していたと言ったほうが正確に感じられるからです。だから、人間の行為も生活も自然そのものと受け取れます。衣服も、住居も、音色も、色彩も、自然そのものだったのです。意識的でも、そうでなくてもとけ合っていたはずです。演出はこの自然の中に人物を同化させようと企ったのです。そうすることが逆に登場人物の喋る言葉を異化し、人物像が際立ちます。作者の狙っている人間の非喜劇がそこに成り立ちます。

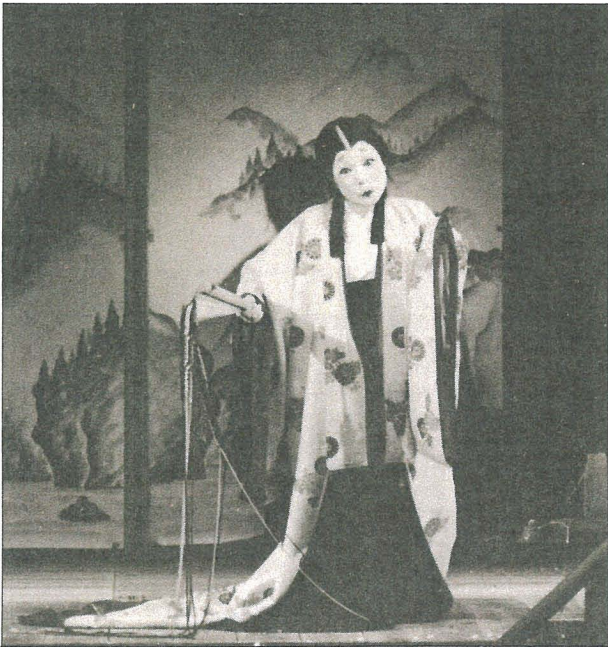
そこで舞台美術家の孫福剛久、舟木日夫両氏の登場となります。提出されたプランは歌舞伎舞台を基調にした寝殿造りでガッチリしたものでした。

*

寝殿造り舞台は劇場の舞台一ぱいに飾られました。三百人劇場では類例のない大きな装置だったらしいが。渡り廊・橋懸り等贅沢とはいっても、普段、演技のエリヤを広くとり演技主体の演出に馴れている新劇のベテラン女優達を困惑させたことに違いあり

ません。

しかし面白いことに、演技動作に対する制約が当時（平安朝）の女性の動作に結果として似せるわけです。そのうえ外側の動作の類似は、内面の感情・思考に変化を与え、平安朝のそれに一層近づくことに役立ちました。



小道具・衣裳も出来るだけ、平安朝の風俗に近づけようと思いました。でもその作業は舞台装置のそれよりも一層難しい事でした。なかなか考証を鎌倉期の彼方へ遡及できないのです。

物にかかわる挙止動作に対して具体的には全く盲目同然でした。長袴のまま庭に降りることがあったであろうか。十二単（袷姿）の衣裳のすそさばきはどうかだろう。小袖を着てない当時の女性には、歌舞伎風の派手な裾さばきは無理です。

食事は、その盛り付けは。栄養価は、セックスは。これらの難問に右往左往するベテラン女優達の喧騒に接するのは稽古場での楽しみでした。

この様な困頓につながっていくかも知れない渾純を、むきだしのまま照明家にゆだねたのです。さぞかし岩品健介氏は迷惑なことでしたらう。お気の毒でした。本番の舞台はとにかく活気がありました。

新村礼子演ずる姫の可愛らしいなげき。中村美代子演ずる少将の実直さと健気さ。それぞれの女優の個性的な演技。私の生涯忘れられない作品の一つとなるでしょう。

「しんしゃく

源氏物語

岩品 健介

社団法人 日本照明家協会会員

日本劇場技術協会会員

株式会社 共 立

真暗な中に雪がチラチラ降っている。
降っている雪を通して、格子が見える。
一間。

暫くして、その格子を中から押し上げて、若い女房の上半身が見える。白い上衣、緋の袴。彼女は、（まだ降ってるのかしら？）という顔で外をのぞくが、まだやみそうもないと見てとると、（お、寒い）と言わんばかりに、襟をかき合わせ、肩をすばめて、又格子を下ろす。

真暗な中を雪は音もなく降り続く。

*

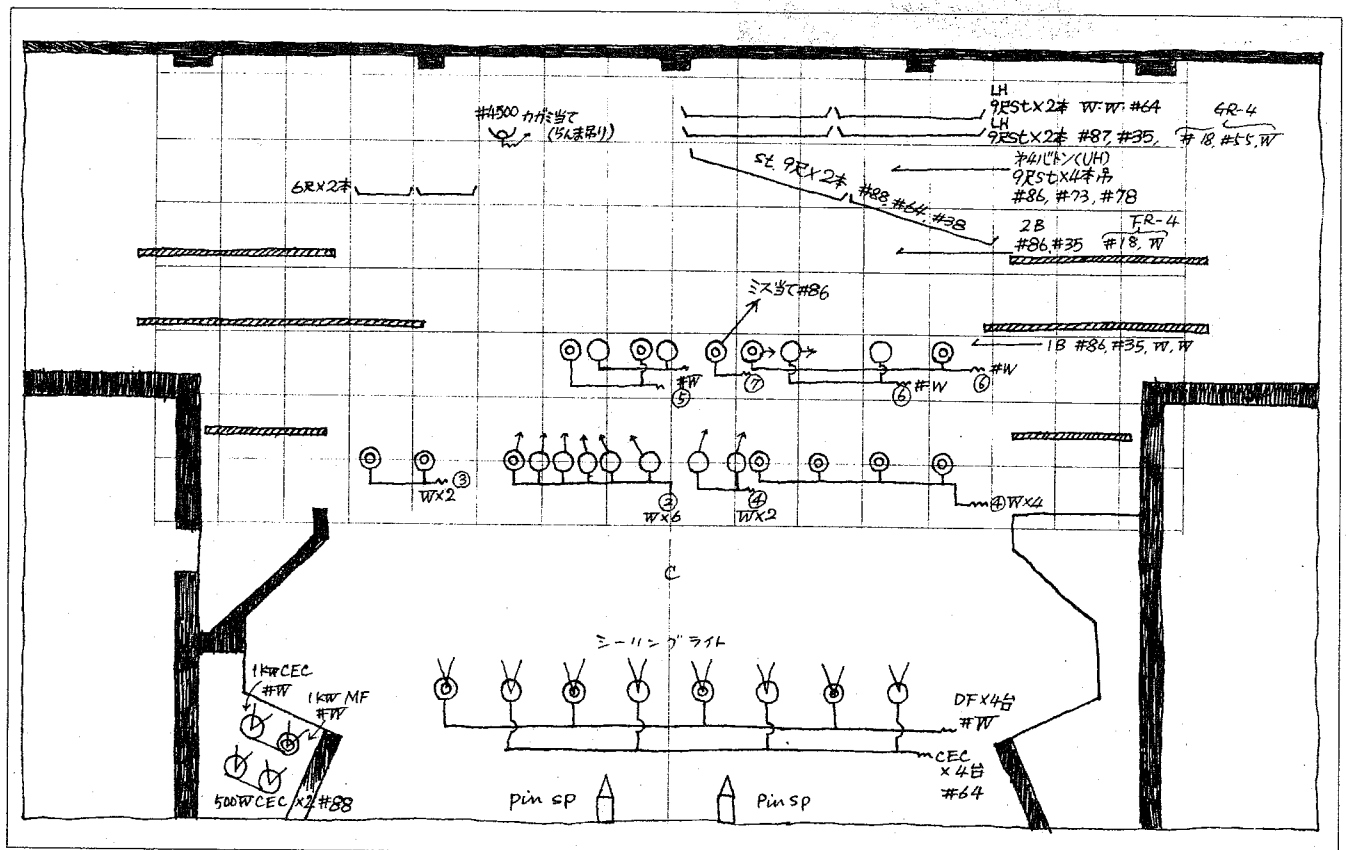
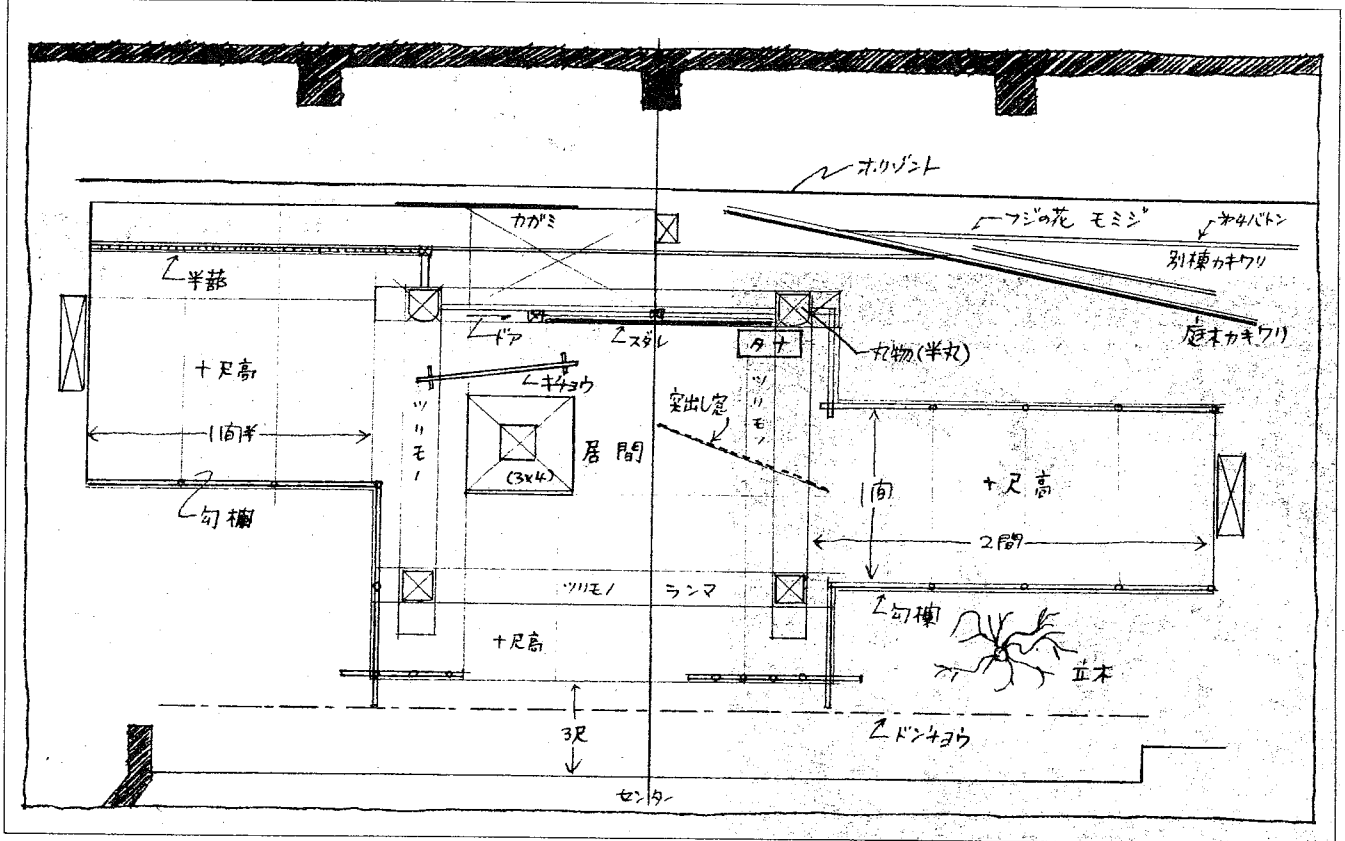
此の冒頭の、あまりにも文学的香りの高いト書で幕が開く、榊原政常先生の「しんしゃく源氏物語」は、殆んど毎年、どこかの高等学校で演じられている名作ではないかと思えます。

そこで、少し趣向をかえて、去る七月十一日から十四日迄、水道橋の労音会館で、「ヨネ企画」が上演したものを、演出家の米本一夫先生のお言葉を頂き、例に依って筆者の舞台照明づくりの実際例を、諸君達の舞台づくりの参考までに、お届け致します。

*

諸君達は、脚本選定にどの位かかりますか？数本の脚本を部員全員が読み、一つの作品を決め、こんどは、スタッフとキャストを決める。そして、もし君が照明係に決まったとする。君はもう一度、読者の眼でその作品を読む。次に。実際に上演する立場で

<第2図>



<第3図>

Act(I) ~ S-1

Q1. 暗転アキ IB.#86 2B.#86 かすかす (雪が降り始める程度)

Q2. 格子のところに ほろと #86 ↑

Q3. 若い女房の上身のいたで pin SP #88 W. 18 (FI)

Q4. Pin SP #◯ out

Q5 (しぼりく元の4つ4つのおかり)

Q6 シルエットで冬の朝 (FI) ① LH #87 菊st #88, 64
② UH -86, 73
③ 2B - #86
④ 1B - #86

Q7 Act II (S-2) 冬の朝完全 (FI) 明け方
① LH 64, W. W. 菊st #88, 64 ↑
② UH 86, 74, 78 ↑
③ Sus all W → 1BW, 2BW
④ Fr all W +88
⑤ Cil all W +64

Q8 かがり火を心でつかみとり... 朗吟の声のみ残して → 早い FO

Act II 秋, 翌年 (しみじみ散りて)

Q9 気持 Amb を生かして 急連 (FI) ↑
① LH #35, 菊st #35, 2B #35, 1B #35, UH #86, 73
② LH #64, W. W. 菊st #35 ↑ UH #86, 73 ↑
③ UH #86, 73, 78 ↑ sus all W → 1B W, 2B W
④ Fr all W +88
⑤ Cil all W +64

Q10 ラスト近く (3回目のみみぢ散り) しぼりく元で 気持 W をオシエ

Q11 奥の顔を蔽って泣く。紅葉が散る... Amb. づとキかせて 早い FO

Act III 春 (藤の花が散っている)

Q12 普通の早さで (FI) (但し気持味をみせて).
① LH #18, W, 55 UH #6, 73, 菊st #18, W, 55
② 2B #18, W, FR-4
③ LH #64, W, W UH #86, 73, 78 ↑
菊st #18, W, 55 ↑ 2B #18, W, FR-4 1B #35, W
④ Sus all W
⑤ Fr all W +88 cil all W +64

Q14 (一同) 皆林組をたたくはに! 後く
少将、根の足を引く。及に(侍従、軍師、叔母) 急いで...
藤の花 罪なくして降りかかす...

Q13 6's Fr. cil. W をおとし気味でいたのを 更に W をオシエ
① Cl. Fr W ↓
② 1B, 2B W ↓
③ UH #18 LH W ↓
④ 5台ほど 降り、近く Sus の W ↓
100% ~ 60% ~ 10% まで (L.C)

Q15 カーテン引 all Full Light ↑

読むでしょう。そうしたら、次に、当然のこととして、照明プランナーとしてその台本を読まなければなりません。

具体的に、照明プランナーとして読むということは、与えられた台本に、読みながら、自分なりの覚え書きを付けてみるのです。

自分が作者ならば、自分が演出家ならば、自分が観客ならば、どういう照明をほどこして見ようかと一心の底では思いながら-Qシートをつくるつもりで、各シーンの照明のイメージを台本に覚え書きとして記してゆくのです。その中に、スタッフが揃って下見に行きます。此の場合は水道橋の労音会館の舞台です。君達も、予選会場校へ下見に行きます。会場の舞台的条件を上手く使うことも舞台芸術にたずさわる者には欠かせない仕事なのです。その間も、キャストの仲間は、猛練習に連日汗を流しています。

美術担当のスタッフは、同様に、台本を読み、演出家と打ち合わせをして、舞台装置のエレベーションを描いています。

照明プランは、演出家の意志にそった舞台装置家のエレベーションを見せて覚えなければ、自分だけの照明プランしか出来ません。

勿論、衣裳の色にも左右されます。効果音に左右されます。演出が要求するすべてのものに照明プランは左右されます。けれども、その中でも、舞台装置という外的条件は、他の芸術的条件にもまして照明プラン作りの条件を動かさないものになっているのです。その他に、現場の下見を必要とする中には、勿論、現場の人達との仕事との打ち合わせも大切ですが、舞台機構、(諸設備)というどうにもならない外的客観条件があるからです。

これも照明に関してわかりやすく言えば、舞台の面積、舞台照明設備の内容、(ボーダーやサスペンションライト、アッパーホリゾンライトやローホリゾンライトの位置)、回路数、ステージポケットの回路数、フロントサイドの位置、シーリングライトの位置と回路数、それ等にかかる照明器具の機種と台数。調光室では、調光回路数と負荷容量、操作位置と舞台との関係、その他、舞台照明に使用出来る予備電源を含めた電気総容量、これ等をさして舞台照明設備機構と言うわけです。

因みに、これからの学校の体育館では、舞台照明に

使用出来る電気総量が30K~24Kは必要です。

さて、第一図は装置の舟木日夫先生の舞台装置図(エレベーション)です。

第二図は、労音会館の舞台平面図です。

そして、此の外的条件に成べく沿い乍ら、演出の条件をギリギリにとり入れて作ったものが、此の第三図の仕込図になりました。

即ち、既設のアップーホリゾンライトよりも、舞台装置の屋根の部分が後にさがっているの、屋根の雪当てには良い位置ですが、アップーホリゾンライトには使えないのです。そこで、アップーホリゾンライト用に、ストリップライト(CT型6尺)を4本一列にして、後方のバトンにバインド線で吊りました。

それから、遠見の切出し当て用に(CT型9尺)ストリップを2本置き、その後ローホリゾンライトを2本宛2列に上手よりに並べました。

当然、持ち込み器具と、既設スポットライトをフルに使用したので、回路数が不足して、可搬型調光器(T-6)のお世話になりました。幸い予備電源単相三線式の刃型スイッチがあったので、そこからディムパック2台分20Kの電気を頂いたわけです。

既設分のオートトランス式の調光機は3Kオートで10本だったので、回路数も12本増します。それにしても、回路数32本でお芝居の照明づくりは少し無理なようです。それでも、回路のさしかえ、コードのさしかえをして、何とか切り抜けました。

照明の良い条件の基本には、このような動かし難い設備条件があります。

*

与えられた枚数も残り少なくなりました。作品の内容と演出については、米本一夫先生から触れて頂いたので、筆者は仕込図についての外的条件にのみ傾いたようです。

そこで、もう一度、第四図・プラン表と第五図・操作表とをよく見くらべて下さい。その中に、舞台照明づくりの内的条件の一端がのぞいている筈です。そこには、操作上のプランナーの内なるもの、チーフオペレーターの内なる技法がいみじくもかくされているのです。勿論、舞台照明も亦、総合芸術である可きで、チーフオペレーターの技術がよくても、個々のポジションを受け持つオペレーター諸氏の技術がひくければ立派な仕事は出来ません。

プラン上の狙いを一言でのべさせて頂ければ、

一、日本の伝統舞台の照明技法を使う。

〈#W(生)を基調にしたもの〉

二、サスペンションライトの配光は、敢えて定式を用いず、セットの柱等に成べく当たらないように、しかも、演技空間に集中してみた。

三、劇的時間を大切に、光にバリエーションを与えた。即ち、静かな場面では少し舞台前の照明の#Wをおとし、再び動の場面になり#Wを元の状態に戻す等、細い注意を払った。

四、幕開きの導入部分では、舞台の状況をそこなわないように工夫した。即ち、暗転の中にステージに雪がしんしんと降っている情景。

五、季節を現わす為に、雪当て、紅葉当て、藤の花当て、でそれぞれ#86、#64+ #88#35、#FR-4で象徴してみた。

六、ラストシーンも亦、導入部にもまして観客に劇的感動をいつ返ももって帰って頂く為に、思いきって、華やいだ明かるい、底抜けに明かるいものにした。

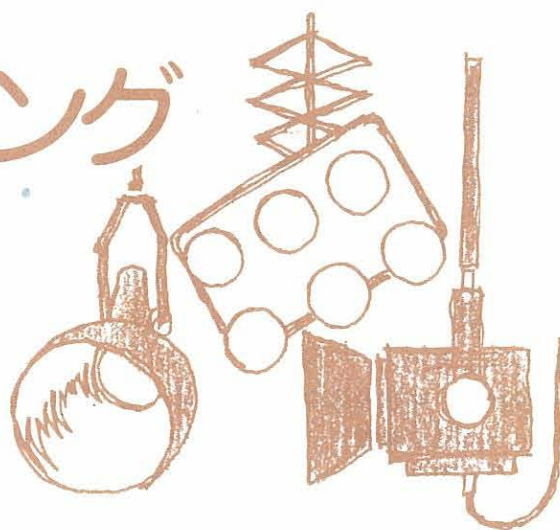
実際の舞台がどうであったか、それは大変問題なのですが、筆者としては、米本演出の線に沿って、しかも、私なりにうけとめた作品の本流に、日本の風土に根ざした光を、此のしんしゃく源氏物語の舞台に当ててみたかったのです。

それは、二、で云う物理的でない、三に云うせんさいな、四に云う心情的な、五の日本的な季節感を、六で云う伝統的な照明、歌舞伎の心、空、それは西欧のラディカルな零ではなく、無に通ずる空、明に通ずる空、

私は、ファルス・センチメンタルをこのように受けとめてみたかったからです。

たのしい舞台照明 演出と照明(その5)

写真のライティング



牛丸光生

女子美術大学講師

今回から少し舞台を離れて、写真のライティングで演出と照明を述べます。舞台を離れてと言っても、照明のつくりかたや、照明器具や、基本的な光の方向は、実によく似ているのです。

またテレビライティングとの関連でも、写真のライティングが深い関係にあることがわかります。

ライト・ポジション

舞台でも、写真でも、そこで使われる言葉が多種多様で、それはライティングそのものが、非常に微妙なものなので、その表現もつくる人により、撮影する時点でも変わってくるのです。

テレビで使われるメイン・ライト、キイライト、サブライト、フィルインライトなどという表現は、写真と全く同じとは言えないので、ライティングの難しさがあるのです。

さて、写真では、光の方向を示すために、被写体を球体とする考えかたがあります。これはライティングで、球体の表面のどの位置からでもライトを照ら

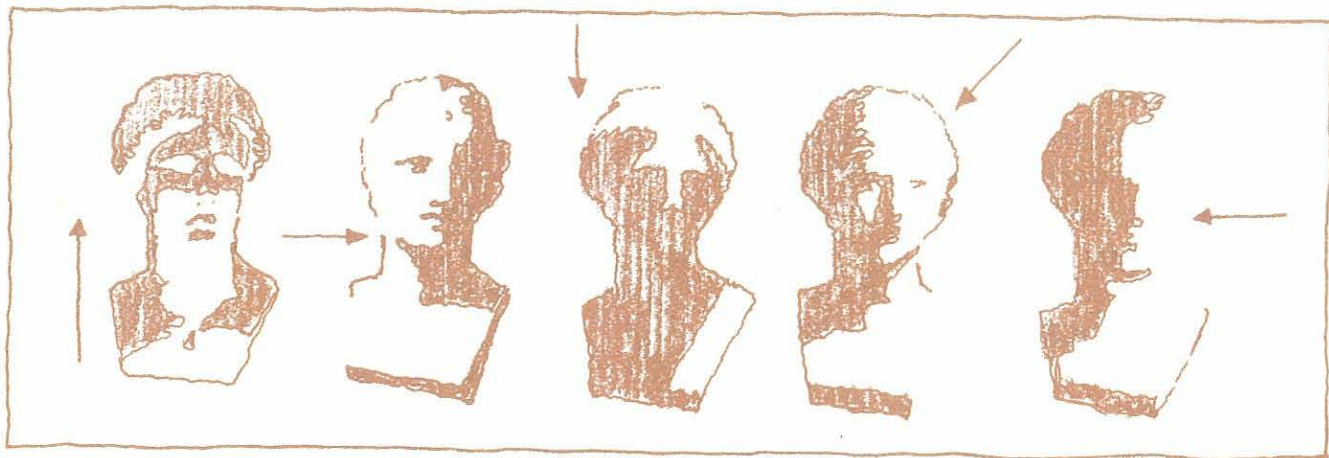
すということが基本となっています。丁度、地球上のある位置を正確に表現するために用いる緯度・経度のように、水平方向と垂直方向のそれぞれの角度に相当するように考えてあります。

水平方向 (経度分角に相当する)

1. セントラル (Central)
2. オフ・センター (Off-center)
3. クロス (Cross)
4. サイド (Side)
5. サイド・リア (Side rear)
6. リム (Rim)
7. リア (Rear)

垂直方向 (緯度分角に相当する)

1. アンダー (Under)
2. レベル (Level)
3. ロー・メデューム (Low Medium)
4. メデューム (Medium)
5. ハイ・メデューム (High Medium)
6. ハイ (High)
7. トップ (Top)



この分類によるライトの位置を少し解説すると、

1. セントラル (Central)

中央からのライトという意味です。一般的には正面光、またはフロント (Front) ライトという言葉も使用されますが、正面光の場合には高さの位置表示が加わると、正面という言葉が苦しくなりますので、フロント・ライト・広い意味で、前面からのライトという意味に使った方がいいでしょう。

ステージで使われるセンター、バルコニーセンター、フロント、とやや同じように考えてもよいでしょう。ただ写真の場合は、被写体とカメラの位置で考えているので、厳密な意味では異なります。

正面光は、順光といういいかたにも含まれています。被写体のカメラ側を平均に明るくします。もちろん単独では陰影がなく立体感のないものになります。特に露光過度にすると画面全体の調子が失われてしまいます。

2. オフ・センター (Off-Center)

センターをわずかに外したという意味で、角度にすると $10^{\circ}\sim 15^{\circ}$ 以内と考えてよい。実際の撮影では、セントラル・ライティングよりもっと実用的なライトです。厳密にセントラルでレベルのライティングというと、カメラ位置と全く重なり、実際にはライトを置く場所がないことになります。ですから、正面光というのはオフ・センターの位置まで含めた考え方でよいので、テレビカメラの横にとりつけたスポットは、オフ・センターとも、セントラルとも言えるのです。

3. クロス (Cross)

クロスライティングの本来の意味はカメラ位置から見て、被写体へ水平角度でも、高さでも、 45° の位

置にあるライトのことをいうことが多い。斜光線ともいいますが、水平角度 45° を、クロスの角度、クロスの位置と言っています。

ステージでクロスと比較すると、タワーライトの位置に相当します。タワーライトが、自然の質感や立体感を表現するのは、クロス的位置にあると考えてもよいでしょう。純粹のクロスライティングは、いわば太陽の位置と考えられます。また複写の場合、両サイドからのクロスライトで撮影するのが良いとされています。

4. サイド・ライト (Side)

被写体を横から照らすもので、真横からやや前にかけての位置と考えて下さい。このライトは被写体をハイライトとシャドウにはっきり二分する性質を持っています。したがって立体感が強調され、1灯でもコントラストの強い力のある表現をします。ステージでは、いわゆるステージ・スポットライトが、このサイド・ライトに匹敵します。ステージライトを人物に横から投射すると、写真のサイドライトと同じ効果が得られます。言葉を変えれば、ステージライトが、写真のサイド・ライトで、文字通り、ステージ・サイドライトなのです。

5. サイド・リア (Side rear)

サイドを真横から少し前まで含めたもので、従来、側面光に含めていたライトを、やや後方に回ったライトを、サイド・リアと呼びます。後側面光といったところで、被写体の前面にハイライトがない代わりに、被写体のフォルムを明確にバックから浮き出させる効果を持つライトです。

6. リム (Rim)

被写体の斜後方からのライトで、この水平角、高

さとも45°の光線を、フロントでのクロスライティングに対し、レイブラント・ライティングと呼ぶ場合もあります。ステージでは、バックライトの斜め後方からのスポットライトを考えればよいでしょう。

写真では、ポートレートで落ち着いた雰囲気を出すのに効果的なライトです。特にプロフィールで使われるケースでは捨て難い味をつくります。

リムは、一般的には被写体の側面のアクセントになり、立体感、質感を表現するエフェクトに用いられます。

7. リア (Rear)

セントラル・ライトの延長線上で、被写体の真後からのライトです。透明、半透明なものの撮影には重要なライトです。またエッジに複雑な線を持つ立体では、ハイライトで描写し、ライン・ライトというライティングの技法です。とくに、この水平角度でのレベル近くのもの、被写体のエッジ全周にハイライトをつくり、リング・ライトと呼ばれます。

ステージで、ロックコンサートで、演者の真後からスポットでフォローして、演者全体を、リングのように浮かびあがらせる技法が流行していますが、これはリア・ライトの応用で、リングライトと呼ばれる技法なのです。

次に垂直方向、つまり高さを表わすライト・ポジションを解説すると、

1. アンダー (Under)

被写体を中心として、水平な面、地球でいうと、緯度0の赤道面より低い位置を、アンダーライトと一括していいます。

この光を主要光線として用いると、ライトポジションの関係で、異様な感じを受けるのが一般的で、特に人物表情では、恐怖、怒り、恐迫感の連想を起こさせます。ステージでは、フットスポットライトに相当します。

2. レベル (Level)

レベルは、地球で言えば、緯度0の赤道面の位置にあたります。レベル・ポジションと呼ばれるように、ライトではZeroの位置にあるので、高さの基準となっています。

3. ローメデューム、メデューム、ハイメデューム (Low Medium, High Medium)

中間の高さという意味で、単独にメデュームと使うときは、広い意味での斜光線か、ほぼ45°のメデュ

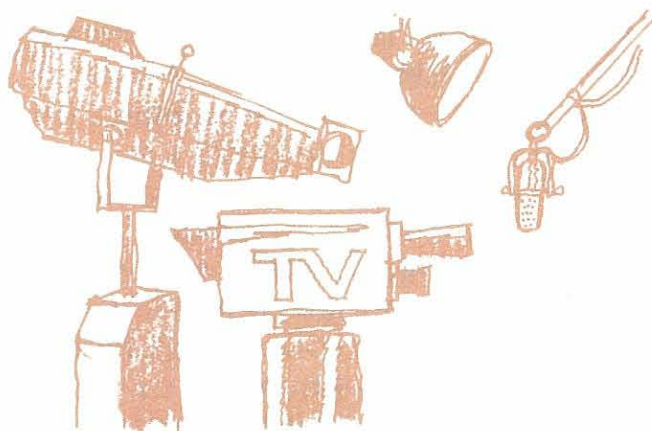
ーム中の高さのライトです。45°よりかなり低めのものを、ローメデューム、高めのものをハイメデュームと表わしています。

ステージでは、ローステージスポット、ハイステージスポットと同様で、それぞれロースタンド、ハイスタンドで処理されますが、写真の場合も使用頻度の多いライトをより正確に表現するときに使い分けると便利です。

4. ハイ (High)

ハイ・エレベーション (elevation) のことで、文字通り高い位置のライトで、Topには入らないものです。レベルライトも、メデュームライトもアンダーライトも、ハイライトも、単独で使うことよりも併用することが多いのです。

また、経度の各ライトポジションの組み合わせで、



効果をあげることが出来ます。ステージでは、サスペンションライトが相当します。

5. トップ (Top)

地球で言うと、北極点に当たります。被写体に対して、上部から指向性を有効に用いるもので、比較的強い感じになり易い光です。この光の用途は、人物の場合は顔以外のアクセントとしての美しさを構成するための、頭髪や肩の線を描写するのに適し、または日光のイミテーションライトとして効果を発揮するのにふさわしいのです。

一般には、形態を表現の主体とするような被写体の場合には、デコラティブな感じが利用効果を高めてくれる光です。

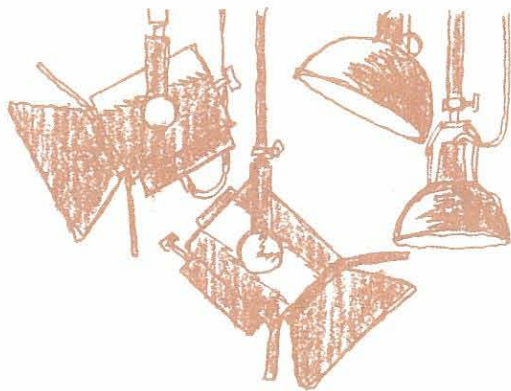
ライト・ポジションは、ステージでも、テレビでも写真でも非常に重要です。このライト・ポジショ

ンは、写真だけでなく、すべての分野に共通していることが多いので、よく覚えておきましょう。写真で使われている言葉が、舞台でも使われ、舞台で使われた言葉が写真のライティングにも使われているのが実際です。

次に、テレビにも使われている種々な光の基本的特性を述べると、

1. キー・ライト (Key Light)

メイン・ライト(Main Light)のことで、ライティングの性格を定めます。大体、直接光(ダイレクト)と呼ばれ、照明器具は、ソーラスポットでもスクープでもよいのです。光束の状態はいろいろですが、一般には影の強く出るライトで、コントラストの強い性格の光です。キー・ライトに他のライトが加えられて、ライティングが完成すると考えてよいでしょう。



2. フィル・インライト (Fill in Light)

フィルライトとも言われています。キーライトで構成された明暗で、シャドウの明るさを調整する役割を持ち、主光に対しての補助光です。俗に‘抑え’とも言われています。

キーライトの強烈な硬い光に対して、柔らかさにあふれた光がよいのです。

人物でも商品でも建築物でも、フィルライトの用途が広く、重要な役割を持ち応用の広い範囲のライトです。

3. エフェクト・ライト (Effect Light)

アクセントライトとも呼ばれます。画面に効果を与えるライトのことで、フィル・インライトが、画面全体のコントラストを定めるのに対して、エフェクト・ライトは局部に限定して強調する性格をもって

います。

アクセント・ライトとしては以下のように注意して下さい。

イ. アクセントは全体的指向や基調に対し、対照的に用いること。

ロ. アクセントは、他の明度に比べて、写真的明度差を強くすること。

ハ. アクセントはコンポーズする場合は、小面積にすること。

ニ. アクセントは、構成で、全体のバランスを考慮すること。

次に、各ライトポジションから、光束の性質を、写真のライティングでは、以下のように考えています。

1. ダイレクト (直接光)

照明器具の性質で、光束の状態はいろいろありますが、一般的に影の強く出るライトで、コントラストの強い、はっきりした性格の光です。

2. バウンス (間接光)

ダイレクトで強すぎる場合、ライトをリフレクターや明かるい天井、壁などに当てて、その反射した光で被写体を照明するライティングです。

3. ディフューズ

ダイレクトとバウンスの中間的な光で、特殊な半透明の紙状のディフューザーもあります。多くは、トレーシングペーパーが使われていますが、カラーフィルターの#00などは、専門家にも使用されています。トレーシングペーパーでは、2枚、3枚と重ねて使用し、その効果を調節します。

4. リフレクター

バウンスライトを本格的に使う場合、いろいろな反射効率を持つ、いろいろなサイズのリフレクターを用意しなければなりません。このリフレクターは単にバウンスライトだけでなく、滑面のハイライトの描写にも効果的です。

また、大きさでも2〜3cm四方の白ケント紙や手鏡を用いたりすることもあります。また滑面の表面には、ハーフトーン、黒をつけたいときには、グレイや黒のものをレフ同様に使用することもあります。

(付記、参照引用図書、「ライティングの完成」GKS)

★シリーズ高校演劇部めぐり★

千葉県船橋市習志野台 8-34-1

千葉日大一高演劇部



同じような劇を上演しても、しっかりした照明施設を持つところと、そうでないところとでは、ずいぶん舞台の映え方が違うものです。

無論、器具にたよらない、ということは、一面で大切なことです。が、演劇に「明かり」というものが係わっていく以上、一度はひとつおりの器具を扱ってみたいものです。

多彩な明かりをどうカットしていくか、あるいは全く使わない等々のことは、それから考えてみることはないでしょうか。

これから訪ねる、私立・千葉日大一高の演劇部は、恵まれた舞台を持っています。男子校なのでももちろん部員も男生徒ばかり。それではその活動ぶりを拝見してみましょう。

天がまるく見える広々とした習志野の台地に、ぼっかりと建つ千葉日大一高。整備中のグラウンドが何面もあるそのまた向こうには、茫漠とした丘が続いています。真新しい体育館に入って舞台をのぞいてみますと…。

土曜日の放課後、男子ばかりの練習風景です。演出担当の伊藤勇先生と、主に照明指導を受けつつ、まだ若い井上義雄先生のもとで、台詞の練習をする部員の声も、一層メリハリがついているようです。調光室に案内されて、いろいろ話を伺ってみました。

—新しい体育館ですね。いつごろできたのですか？

伊藤「体育館はこの5月にできたばかりです。学校は今年で10周年を迎えます。両国の日大一高の姉妹高なんです」。

—舞台も、ただ新しいというだけでなく立派ですね。中割れ幕が2つもついているとは、なかなかぜいたくな…。

伊藤「と思うでしょうが、男子校で芝居をやるにはこのくらいの設備は必要なんです。男子は女子と違ってスピードのない芝居には見向きもしませんからね。転換でもたついたら、席を立っちゃいますよ。男子校ではまず生徒を芝居好きにするための工夫が必要なんです。ボヤボヤしていると男子校の演劇部は消える運命にある時世ですからつらいんですよ」。

—お見受けしたところホリズント幕とアッパーホ

リズントとフットライトがまだないようですが、昇降装置もあるし、想像していた以上の設備(図I参照)ですね。それにこの調光器はいいですね。ふつう高校くらいだと、大概マルモのT-6が入っているんですが、これはT-15ですから大したものですよ。操作はどなたが？

井上「一応、部員一人一人が操作できます。男子ですから器械には強いですね。一度教えていただけなんですが、我々が思う以上に、生徒は興味を持ちますし、覚えが早い」。

—井上先生は照明に詳しいのですか？

井上「大学時代に演劇部の雑用をやらされてね、それで少し覚えました。あとは自己流ですよ。まあ本だけはずい分読みましたが…」。

—すると、照明プランは先生がおたてになる？

井上「プランという程のものではありませんがネ、生徒の意見を入れての共同作業です」。

—照明に関して何か問題点はありませんか？

井上「そうですね。お説のとおりホリズント幕とアッパーホリズントはそのうち設備したいと思ってます。フットライトは高校演劇の舞台には必要ありませんが…。舞台の間口12尺、奥行き6尺はいいんですが、それだけ体育館フロアが広いわけで前からの明かりがとれにくい。本式のシーリングライトが欲しいところですね。まあ、体育主体の建物ですから、そうぜいたくは言えないと多少あきらめてます」。